

愛の実験台

—— 生野の康秀峰さん
カンスボン

木は泣いた

康秀峰さんカンスボンは木の泣き声を聞いた思い出を話した。彼は九歳だった。大阪生野の小さな古墳に少年たちが集まって、手裏剣よろしく木にナイフを突き刺して遊んでいたときのことだ。

九つするとき、生野に御勝山公園つてのがあんのやけど、その大きな松の木に白墨で的描いてナイフ刺すゲームあってん。ぼくの番きて、刺したらね、抜いたとたんね、木が泣いてた。ぼくね、めちやくちや悪いことしたと思うて、その夜眠れんかった。そのナイフ抜いた瞬間、ぼく走って逃げて帰った。木の泣くの聞いて、泣きそうになった自分を友達に見られたくなかったんや。そやから逃げて帰った。夜、布団かぶってずっと泣いた。ぼく、こんなことで自分生きていかれへんかもしれんと思った。こんな気弱くて優しかったら。

康さんかんはまるで女形おやまの役者のような喋り方をする。いつも彼は、彼の細長い女性のような指を自分の左耳下にそっと添えて、不思議な光に満ちた眼でどこかを遠く見るようにして、柔らかな抑揚で喋る。長い睫毛の下の黒い眼はまるで宝塚のスターのようだ。彼が「そやけど」とか「やから」というとき、その語尾の「ど」とか「ら」は柔らかくしななって、次の言葉に自分を渡してゆく。彼の言葉の語尾はどれも優しくたゆたう。そして、そのことを彼は愛している。

きっと彼はおねえ言葉が好きはずだ。書道家としての彼の字は柳の葉のように細くしななって、彼は女性の優美さがたまらなく好きであるにちがいないと思わせる。きっと彼は男の無骨さや粗野な猛々しさを憎んでいるにちがいない。もしかしたら、彼は女に生まれたかったのかもしれない。

しかし、彼のしてくれる話は暴力に満ちているのだ。彼の語る愛、彼の語る優しさ、彼の語る平和は激しい暴力の記憶と背中合わせになっている。

心も体も、みんな強く鍛え直さなかんって思うようになっていった。中学のとき、家の前で大人の男の人がヤクザのような二人にめちやくちや蹴られて、どつかれて、もう死んだんやないかと思っぐらいになって、すごい血出ていて、そやけど、ぼくも、金縛りみたいになっついて、人も呼べへんかった。怖くて。やっと動けるようになったとき、ぼくは家に逃げた。でもね、情けなくて情けなくて、自分は人でなしやと思った。次の日、従兄のおじさんに保証人になってもうて、空手の道場に通うことにした。そういう場面では、ぼくはその人守るべきやと思った。でも、ぼく弱くてそれができんかった。

おもしろいね。高校出て、大阪には就職口なかったから、東京に出たんやけど、十九のとき、たまたま東京のある繁華街でね、通りかかった二人が二人ぐらいの男にめった打ちにあつて、それを一〇〇人ぐらいの人が遠巻きに見ているのに出つくわした。ぼく助けに入ったら、みんなも助けに入ってくれると思うて、入ったら、ぼくだけで。そんなとき二人は癡撃まで起こしておつて、つぎ蹴ったら死ぬで、というところやつた。ぼく飛び込んで、どつかれたんやけど、中学から空手やつてたから、つぎのパンチのとき一発で相手倒してもうた。それが、ちょうどその辺で有名な人みたいやつて、兄貴がやられたつてゆうんで、もうどんどんどんどんくるわけね。二〇人ぐらいになつてた。五人ぐらいには蹴りを入れてね。そのころは、ぼくは一発で相手の骨折る力あつたから。

さつきゆうた中学のときのがきつかけで、ぼくは空手にずっと打ち込んでたから。練習試合の帰りにちよつと柄の悪い子が果たし合いを申し込んできて、はじめは断つてたんやけど、断れなくなつて、それじゃどつちかが『参つた』とゆつたら終わりにしよつてゆうて、やつたんやけど。相手も、つぎ喧嘩したら退学になるつて子やし。始まつて、一発で、つぎいこうかと思つたら、『参つた』とゆうから。ぼくの一発で骨が砕けてしもうた。果たし合いの申し込みも三回目からはなくなつてもうた。三人のヤクザに勝とうと思つてから、毎日ボディビルから始めて、蹴り五〇〇回とか、ずっと鍛えてた。パンチより蹴りの方が効くし、速いし。

繁華街の話に戻るんやけど、気がついたら、ぼくはどつかの垣根を壊して手に煉瓦をもつてた。二〇人に取り囲まれてぼく独りやつた。だからパトカー来たときは嬉しかつた。そやけど、ぼくも逮捕されて、手錠はめられて留置所に送られた。家裁に送られて、その日二七人が少年院に送られることになつていて、ぼくもそこに入つてた。

裁判で最後に裁判官が調書見ながら「これで間違いはありませんか」つてゆうから、ぼくは、その通りですとゆつてから、「もう一度同じ場面に出会つたら、ぼくはもう一度同じことをするでしょう。ひと二人死ぬの知らんぶりではできない」つて答えたんや。裁判官は「君の話聞いてると調書とだいぶ違うね」とゆうんやけど、それはぼくが外国人登録証をいつも持ち歩かないから、取り調べのとき、面倒にならないようにと相手のいうことになんでも「ハイ、ハイ」答えとつたら、そうなつてもうた。警官つて上手いからね。ぼくは「少年院でも教護院でもどこでもいかせてください、勉強ですから」と答えたんやけど、裁判官笑つてた。

それから「ただ、ぼくのいないあいだ面倒見る孤児の子二人、見てください」と付けくわえたら、また笑われた。「ぼくがいなかつたら、一人はわきがでノイローゼだし、もう一人はちよつと荒つぽいから困るんです」とゆうたら、裁判所からすぐ、このぼくの話本当か、西新井大師の交番に電話かけはつた。ぼくその辺で有名やつたから。路上生活してる人に、ぼくの部屋三畳一間やけど、誰でも泊まれるようにしたりしてたんや。だから交番の人が、裁判官に自分が身元引受人になりますから少年院に送らんとつてくださいつていったんや。ぼくがいないと、あの辺困るつてゆうて。そのこと聞いて、二人の裁判官は泣きはつてね。

「ここ最後の場所やで。ここは少年院の年数決めるところで、助かる場所とちがうんやで。そやけど警官が保証人になるつていうから、少年院はやめにせんとな。なんで君みたいな人間が生まれたんや」つて。その後二時間ぐらい待つてたら交番の警官が身元引受人になつてぼくを引き取りにきた。

康さんはこうもつけ加えた。

精神障害の人と被差別部落の人と在日コリアンは、事件起こしたら、即送られるよ。身元引受人がいるから出してくれない。一から一〇〇まであって、二〇番目から一までのところは、二〇から一〇〇までのところに通用する法律も常識も通用しない。そこは闇に葬られる。ぼくの場合だって、後で考えたら、表彰されて当たり前のことやね。ところがぼくが在日コリアンだから、ぼくは傷害の罪を犯した不良や。少年院送りに決まっちゃったんや。そやけど、ぼくほんまに少年院いつてみたかったんや。少年院から帰ってきた子を面倒見るのに少年院のこと勉強してきたかったんや。ぼく、そういう子の面倒ようけ見てたからな。それに腕には自信あったし。少年院で苛められることはないし。

一から一〇〇まであって、そのうち一から二〇まではこの日本社会では「見えない人間」——或る有名な黒人文学作品の題名を借りれば——に変えられてしまうというのは、康さんの基本認識ともいうべきものだ。彼はこうも語った。

一から一〇〇までというでしょ。ぼくは一を守ったんです。それがぼくのボランテア。一の下はもう無い。死が待つてるだけ。ぼくの家は貧しかったし、兄も弟も障害をもってたし、生きていけるだけましというところにつねにいました。しかし、生きていけるだけましなとこの、その下にもう生きていけない世界がある。ぼくは一のボランテアをしてたんやね。ここで見放したら、後がもうない人たちへのボランテアという意味やけど。

その世界は積み重なった差別に呻うないている世界やね。差別は必ず暴力を引き起こします。必ず警察沙汰が起きます。一のボランテアの現場はだから毎日が命懸けやった。ぼくの眼から見たら、一から一〇〇までのうち二〇から一〇〇までの八〇分は行政がやってくれはる。二〇から一までは、行政は見ないんですよ。あっても無いことにしてしまう。たとえば障害もすごく多様化してるでしょ。法律の方はそれについていってないで、昔のままです。すると、一から二〇までは行政の目からはこぼれてしまう。「一から二〇までは死ね。」というのと同じことが起きてしまうんです。ぼくはその一から二〇までのボランテアをしてるんです。重度の障害者、そしてそれを抱え込んでうちもさっちなもいけなくなっている家族、たとえばこういう人たちの世界。知的障害の人。暴力に溺ひたれている人。破裂しかけてる人。

その鋭い分水嶺がいれば振り返って彼の視線となる。彼はいつもその線を見つめる。そこには彼の幼年時代以来のたくさんの「弟」たちの記憶が沈殿している。彼の実際の弟も、それからたくさんの彼の他の「弟」たちの。

彼がそういう人間たちを「その子は」と語るときの言葉の調子はなんとも優しい。今五一歳の彼がたいして年の違わない男たちについて「その子は」と語り出す。なぜなら、彼らは昔からの彼の友達であり、「弟」であり、「家来」だからだ。生野の在日コリアンの一人のガキが面倒を見ていた弟分だからだ。彼はほんとうに少年院にいきたくったにちがいない。彼のいうとおり、たくさんの「弟」がそこから帰ってきたのだから。

康さんと「愛」という言葉

康さんは十数年前に書いた一つの詩を僕に見せて、これが自分の根っこにあるもので、「コリアポランテティア協会」をつくった自分の志をあらわすものだと言った。この詩は、生野から生まれた在日韓国人・朝鮮人の共同の祭、南北分断の垣を超えようと「ワンコリア・フェスティバル」と名づけられた祭でも、また阪神淡路大震災チャリティー・コンサートでジュリー・バックによっても、あるいはまた或るキリスト教団体でも、自分たちの想いを代表してくれる言葉として使われたという。

地上に平和をみちあふれさせるためには

戦いで勝ち取るよりも 愛で勝ち取りたい

あらしいは、

互いにきずつき にくしみを生む

愛は人を育て、すべてを包み

互いにみとめあう心を育てる

色が白くても 黒くても 黄色くても

目が見えなくても 足がなくても

手がなくても

心は一つ

願いは一つ

地に平和

僕は康さんの話を聞きながら、一度こう質問しかけたことがあった。「カンさんは韓国の有名な詩人の金芝河の評論とか、最近のものを何か読んだことがありますか？」と。康さんは気恥ずかしそうに笑ってこう答えた。

ぼくは朝鮮学校にいったでしょ。そして高校生になってからはさつき話したように空手に打ち込みました。それであんまり勉強しなくて、読める漢字も少ないんです。書家としてたくさん漢字を書くことはできるんですけど、読むのは難しい。ぼくの知識はたいい漫画からのものです。ぼくは漫画で読んで高杉晋作をいちばん尊敬してます。最近です。あらためて思想の勉強をしようと思ってるのは。

なぜ僕がそのとき金芝河の名前を出したかといえば、話のなから立ち現れてくる康さんが底辺の人の苦悩に寄り添うその姿や「闘争」という論理を超える論理を掴もうとする必死の様子は、彼が在日朝鮮人だということもあって、僕には金芝河の存在を連想させたからなのだ。

かつて僕は「風刺か自殺か」という表題の金芝河の評論を読んだことがあり、彼の精神がまさにそのタイトルの示す二者択一の苛烈さを生きていることに強烈な印象を受けた。その後彼の詩や評論をいくつか読んだ。金芝河はつねに娼婦や泥棒やヤクザ、いわば無残に敗死してゆく底辺

部民衆の生の只中から生まれてくる視点を我がものにしようとし、かつそこからこそ権力を嘲笑ってやまない不敵な笑いを立ち上げようとしていた。当時彼は韓国民主化闘争の神話化された英雄詩人であったし、この闘争の精神性を代表する「良心の詩人」と目された。

とはいえ、彼の体現しようとした民主主義精神は西欧流のものではなかった。それは「市民」の民主主義ではなくて、「窮民」の民主主義だった。ここで康さんの言葉を敢えて使えば、一から二〇までのあいだの人間の現実に取り添うことから発想された民主主義、けっして底辺主義を捨てまいと決意している民主主義、それが彼の民主主義だった。

その後、金芝河は韓国民主化闘争の経過のなかでいわば「落ちた偶像」の役割をみずから買って出る。彼は闘争の英雄に祭り上げられそうになるや否や、酒に溺れ女に溺れ自壊の瀬戸際でやつと踏みとどまっているような自分の非英雄的側面をさらけ出すことをとおして、この英雄化を拒絶した。英雄化を受け入れることは自分の視点への裏切りにはかならなかつたのだ。

また彼は、かつての「同志」たちから「裏切り者」呼ばわりをされる危険を顧みず、学生の焼身抗議自殺に象徴されるような当時の過激化した韓国学生運動の英雄主義的な闘争戦術を激しく批判し、「闘争」の論理や英雄主義のうちに潜む権力性を告発し、また西欧文明の「反生命的」性格を批判し、朝鮮民族の伝統的な太極思想に復帰するような仕方で独特なエコロジー運動の、また「生命」主義的精神運動の創始者になっていった。彼はたぶん或る種の宗教家になった。そして多くのかつての彼の「同志」たちは彼と袂を分かつた。彼がそうした精神運動のなかで記した言葉を一つだけ引こう。

『飯・活人』のなかにこうある。「恨の蓄積のない所では、恨の克服もありません。蓄積された恨のそのとてつもない切り崩しの力によってのみ、恨自体は消滅します。飢えた人が飯を求めるように、喉の乾いた人が水を求めるように、子供が母親を求めるように、仏を渴仰し待つ心、仏に出会うことは難しいという思い——その深い恨がなくては、本当の解脱に到達することはできません。しかし、この逆説的な転換は、恨の反復と復讐の悪循環を断ち切る聡明な断、霊性的でありながらも共同体的な断、すなわち決断を条件にしてのみ可能なです」と。

僕は康さんの生き方に、なにかしら金芝河と重なり合うものを感じたのだ。

「愛」と聞けば、「闘争」好きの理論屋は即座に肩をすくめ憐憫の笑いすら口元に浮かべ、その非政治性のもつ善意の反動性を事細かに指摘するにちがいない。実際この僕からして、康さんの詩の言葉そのものに関して率直にいえば、それは多くの場合あまりにもありふれたものとしてしか受け取られないだろうと思う。もし僕がこうして直に康さんの話を聞かなかつたのなら、僕はただその言葉の脇をシニカルな笑いを浮かべて通りすぎただけであつたにちがいない。ああ、ここにもまたあの「愛は地球を救う」が、と呟きながら。

この詩のなかに込められている認識に彼が辿り着くうえで、つまり「闘争」の論理を超える思想を是が非でも掴まなければならぬという決意に彼が到達するうえで、どのような具体的、いわば身銭を切った経験、彼が積み重ねばならなかつたのかということ、そのようなことをちよつとは想像してみようかという気すら起こすことなく、僕は通り過ぎただろう。

だが、最も重要なことは、康さんの詩は彼の経験の産物だということである。それは、彼がその全身をもっておこなつた経験をとおして築いた言葉なのだ。そこには撤回不可能な彼の認識と決意が込められている。

彼の口にする「愛」という言葉の背面には彼が、また彼の「弟」たちが、彼のよく知っている幾多の人間が経験したさまざまな暴力の記憶が刻みつけられている。僕は、誰彼の思想家の名前をあげ、その影響を尋ねるといった常套的な態度、そのとき危うく僕自身が陥りかけた態度、それがまったく無意味だということに気づいた。僕が専心すべきは彼の経験、経験を聴くことであった。事実また僕が聴きたかったのも彼の経験、経験だった。誰であれ、ただそこからこそ自分の生きる思想を汲むことができる、その人間の経験、経験、それだけが問題であった。

一人の「弟」

僕は康さんにこう尋ねた。闘いによってではなく、愛によってという主張は、在日コリアンの人々からの激しい批判に会わなかったですか、と。康さんはこう答えた。『なんでわれわれを差別する日本人を助けなあかんねん』とゆうて、私を殺そうとやってきた人だっていました」と。僕は続けてこう尋ねた。そういう康さんの考え方が自分のなかではつきり形をとったのはいつ頃でしたか、また、どんなことをきっかけにですか、と。

再びここで僕は、彼のなかの「弟」たちに出会うことになる。彼の話は螺旋形の軌跡を描く。そこから出発し、そこへと戻る。その軌跡をとおして彼のいう「ボランティア」が彼の存在の形となる。

一七歳のときです。それまで潜在的にあったものがはっきりしてきたのは。

ぼくは子供の頃から無意識のうちにボランティアをしてました。生まれつきの身体障害者の弟の面倒を見るとか、近所の知的障害のある子の勉強を見てやるとか、そういうことを指してゆうんやけど。小学校三年になっても「あいうえお」が書けない子なんかやね。ぼくはその子に放課後一生懸命字を教えるのが好きやった、そしてその子だんだん書けるようになっていったんやけど、「朝鮮やから帰ってっえな」といわれたときは無念やったね。「あと五文字だけ覚えるまで来させてください」とゆったんやけど。そういうことはその後もうっぱい経験しました。

でも、その人がそういうのはしようがない。日本の間違った教育のせいやから。

ぼくは、しようがないと考えるんです。そして、その人が変るためには、ぼくがもつと輝かなあかん、そう考えるんです。ですから、そういう目に遭うたびに毎日が反省です。もっと自分に愛の力があつたら、愛の香りがあつたら。

ここで康さんが話してくれた二人の「弟」のことを、僕は書きとめておこう。彼のほんとうの弟ともう一人の「弟」のことについて。

ぼくは弟に三十回は泣かされてます。弟は生まれたとき、片方の足の甲が反対向きに反つてるように生まれてきたんです。それで歩けなくて、うちはお金もないし、それで鉄板を拾ってきて無理やり当てる、足の反りを無理に戻して、一応歩けるようにしたんですよ。でも、歩くと痛いんやね。

だから弟は、弟に肩貸して支えて歩いているぼくを、痛いからその鉄板つきの足で蹴るんやね。ぼくは六つ七つ頃から面倒見てたからね。鉄板で蹴られたら痛いから、泣きますね。それで三十回ぐらい泣かされた。三十回目からね、弟に蹴られて、その後どつかれて、ぼく意識不明になった。

ぼくが八つぐらいのとき。そのときはリハビリで弟を結構遠くまで歩き連れてって、それで弟は疲れたんやね。苛立って、どついたんよ、ぼくを。そのことがあってからは弟はぼくをどつかなくなつた。ぼくの意識戻るまでは弟も帰れないわけやから。

そういつて康さんは笑つた。なんで弟に蹴られたときにどつき返さなかつたのかという質問に、彼は静かにこう答えた。「彼が蹴りたくなる気持はよくわかつていたから」と。その弟はつい昨年亡くなつた。彼のことについては康さんはこう話す。「弟は、亡くなつたけど、ぼく、弟は亡くなつたことに入れてないんです。自分でそう暗示かけてる。弟亡くなつたと思つたら、このボランティアできへん。いつも弟思い出してしまうからね」と。

もうひとりの「弟」も死んでしまつた。三年前のことだ。

ぼくにとつて大事な人が三年前に死んだ。二九年のつきあいの人間。その彼は母親のお腹のなかで障害者になつた。母親が二四時間ヘップサンダルの糊付けの仕事やつてて、その糊の中で、お腹にいた彼が障害児になつた。もちろんコリアンです。神戸の長田区もそうやけどヘップの仕事はコリアンの仕事や。彼は知的障害で、自分の名前教えるのに、ぼく四ヶ月かかった。彼を助けようと二九年間やつてきたけど、その子が亡くなって、今ぼくの心はすごく淋しい。なぜかとゆくと、その子の障害は治つてきていたから。その子、知的障害があるからヤクザも首になつてしまつてね。親分のいうこと聞かんから。それで組の者からリンチ食らうて、それで親がぼくの噂聞いて、真面目にしてくださいっていうて、連れてきた。ぼく最初の出会いから覚えてますね。彼デキヤやつててん。ぼくトウモロコシ二つ買つて、彼に首締められた。ちよつとしたいざこざで。二十ぐらいのときかな。半年ぐらいして親がぼくのとこ連れてきた。ぼくは彼を見てすぐあの子やなとわかつたけど、彼はもちろん覚えてなかつた。いっぱいいる客の一人やからね。一年ぐらいはぼく、彼の家来みたいにされてた。でもね、一年ちよつとして、ぼくの友達でベントのつて羽振りきかしてたのがおつてね、じつは彼がその子の親分で、それでその後の二八年間はその子はぼくのことを「会長」、「会長」って呼んでた。ぼくの家来になつたもんには組長もたくさんいる。職業がなかつたからね。

その子はね、ぼくの影響か、正義感が強くてね、知的障害をもちながら自分より弱い人を守つてた。彼は酒ばっかり飲んで、五年前から尿に血が混じるようになって、それでついに肝臓壊して死んだんやけど、ぼくも大酒飲みで、それで一緒に酒やめようやとゆうたんよ。ぼくもやめて、あの子もやめたけど、隠れて飲んでた。あの子は痩せてて五五キロぐらいやつたんけど、死んだときは水ぶくれで八〇キロ超えてた。ぼくの前では飲まんから、みんなには「会長だけにはゆわんとけよ」とゆつてたし、脅しはきくからね、完璧なヤクザやから。ぼくがいなときはヤクザ。病院いつても恐喝しよる。痛み止め欲しかつたら、六人部屋の患者みな恐喝しよる。ぼく彼によつ利用された。でもいちばんの友達やね。だからいちばん

よくその子の夢見る。

大家のおばあちゃん

なぜ、康さんは日本人をも助けようとするのか。彼のコリアンの「弟」たちは等しく日本人による酷い仕打ちを経験し、たとえば彼のいちばん大事な二人の「弟」の背負った障害には、在日コリアンに日本社会が加えた暴力が鉛のように沈殿しているのではないのか？ そう康さん自身がいま語ったではないか？

コリアボランテニア協会を始めたときは、日本人への憎しみという問題が協会に、ぼくに振りかかった。在日コリアンはみんな日本人に酷いことをされた経験をもってる。日本人に酷いことされたのに、なんで？ って。

阪神大震災が起こったとき、ぼくはこう決めました。関東大震災のときコリアンは日本人に殺されました。間違ったデマのせい。そやからぼくは、震災がおこったとき、コリアボランテニア協会を守るだけでも大変やったけど、歴史に新しい幕をあげたいと思った。関東大震災とは逆に、コリアンが日本人を助けるべきやと考えた。そやからぼくは、朝鮮総連と韓国民団をだまして、一つの仕掛けをして、神楽小学校で二つが一緒に炊き出しをするようにもっていった。そしたら、あらゆる新聞の次の日の一面にカラーで『統一炊き出し』って出たんよ。今でも長田区にいったらコリアンは日本の人に感謝されてますね。他のボランテニア団体はみな引き揚げましたけど、コリアボランテニア協会はまだいってるんです。それはね、歴史の最後の頁にね、関東大震災のときに日本人はコリアンを殺したけど、阪神大震災では最後まで日本人を助けたのはコリアンやったと、そう記されたいんよ。

僕は次の問題があることは知っている。在日コリアンはみずらのアイデンティティをどこに求めるのか、求めうるのかという問題に関して、まったくもって特異な、そして困難な状況のなかにいるということ。彼らは果たして韓国人なのか、北朝鮮人なのか、コリアンなのか。彼らが日本社会からつねに排斥されてきたことは周知のことだが、彼らがまた韓国社会からも、北朝鮮社会からも排斥される大きな可能性を負わされていることは火を見るよりも明らかではないだろうか。

今や、二世以後の多くの彼らは朝鮮語を喋ることができず、ハングルを読むことができず、日本語を母語とする人間である。彼らは韓国人とも北朝鮮人とも歴史も生活も文化も共有してはいない。歴史！ここでいう「歴史」とは、たんに社会学の教科書や年表に記されているような政治的大事件の名前の羅列が示す歴史のことではない。家族の誰彼、親族の誰彼、友達の誰彼の記憶と一体となり、そのとき見た町の風景や聞いた歌やかいだ匂いと一つになり、彼らの身体の底からきつかけさえあればいつでも立ち上げることができる、生きた身体の記憶としての歴史だ。在日コリアンはいかに日本社会から差別され排斥され続けてきたとはいえ、また現に今もそうされているとはいえ、彼らが生きてきた歴史・生活・文化は彼らを排斥し差別してきたその日本人とのあいだに共有しているそれだ。彼らは、韓国人と北朝鮮人にとっては、彼らが日本人にとってそうであるよりはるかに以上に異邦の者ではないのか？

悲しいかな、人間はつねに《敵》を求める、差別と排斥の対象を求める、《異者》あるいは自分と全く異なるものとしての《他者》を求める。それが必要なのだ。そうやって必死になって——ここでその言葉を敢えて使えば——自分の「アイデンティティ」なるものを守る。その事情は日本人に限ったことではない。日本人が自分を優越者として誇示したいという「アイデンティティ」防衛のさまざまな理由、いいかえれば人間的にいつて度量のない貧しい惨めな理由から、差別と排斥の絶好の対象として在日コリアンを発見してきたとするなら、同様に、別な事情の脈絡からであれ、韓国社会は、あるいはまた北朝鮮社会は差別と排斥の絶好の対象として将来在日コリアンを発見するのではないか？ 多くの韓国人は、また北朝鮮人は、日本人がそうであるように、在日コリアンが日本社会で負ってきた苦悩を知らないし、仮に知識として知っていたとしても、これまた日本人と同様に、それをほんとうに理解できるわけではない。

これに反して、在日コリアンが朝鮮語を喋れず、ハングルを読めず、民族の生きた歴史を身体として共有していない、韓国なり北朝鮮なりの国家が背負ってきた正統の歴史の《外部》にいる人間であるということは、誰でもが認識しうる事実なのだ。多くの韓国人、北朝鮮人にとって在日コリアンはその外見からたちまち「日本人」に同一視されてしまう存在だ。つまり、一九四五年以降、韓国と北朝鮮がそれぞれの仕方で耐え忍んできた朝鮮戦争を新たな開始点とする民族的苦難の生きた記憶を共有することのない者、帰国を拒否して日本に留まり、かくて極東において例外的な「平和」と「富」を享受することのできた者たち。ここからして、「民族の裏切り者」というレッテルは、もしそれを貼る存在がこの二つの社会に必要な状況が何らかの理由から生まれるならば、たちまちのように在日コリアンの上に襲いかかるのではないか？

では、在日コリアンは日本に帰化すべきなのか？ もはや帰化するほかないという意味で。歴史の非情な進行が否応なく創り出した運命として？

僕は、もとよりこの問いが直接に向けられた人間ではない。とはいえ僕は、この問いにはたくさんのお答がありうると考える。然りか否かの二分法はもう意味をなさないと思う。帰化に同意する答には実はたくさんのお答が孕まれているであろうし、帰化を拒絶する答のなかには実はたくさんのお答が孕まれているのではないか。

僕の知っている或る在日コリアンの青年はこういった。在日コリアンは在日コリアンであるしかない、韓国人でも北朝鮮人でも日本人でもなく、在日コリアンであるしかない。おそらく彼は、「帰化した場合であっても」とつけ加えるのではないだろうか。同意のなかにもたくさんのお答が孕まれるのだ。そして繰り返せば、拒絶のなかにもたくさんのお答が存在する³⁰。

しかし、次のことだけは否定しがたく明白だ。帰化は、どんな場合にも在日コリアンにとってひとつの屈辱として生きられるということは。なぜなら、われわれ日本人はそれが屈辱だということへの想像力をまったく欠き、心を寄せる術を知らず、根本的にいつて「無関心」だからだ。そういう無関心な日本社会に帰化することは、どんな場合でも帰化する人間にとって屈辱である。

在日コリアンが日本で生まれ育ち、日本語を母語とするコリアンであるという彼らの全現実のなかにはどんなことが貯えられているのだろうか？

康さんが話してくれたことは、そこに貯えられているものはたんに屈辱の経験だけではないということであった。そこには、ともかくにも人間が隣り合って共に暮らしてきたという決定的

な生の現実性が、その現実性が生み出す貴重な財宝のような経験があるのだ。共生という契機、

暮らしのなかで助け合い支え合うという契機が。

それは、いかにそこに屈辱や差別や怒りの契機が分かち難く織り込まれていようと、生の立場そのものをあらわすものとして厳として存在している。共生なくして生はない。人間はけっして独りでは、また自分たちだけでは生きられない。在日コリアンの歴史は差別と屈辱の歴史であったと同時に日本人との共生の歴史でもあった。それが在日ということの意味なのだ。康さんはそのことの決定的な重要性を僕たちにわからせたかったのではないか。阪神大震災に際会しての彼の決意には経験的基礎がある。また彼のコリアボランティア協会の活動にも彼自身の経験的基礎がある。温かい、良心的日本人との共生の経験が。彼はこういうことを僕に語った。

ぼくは日本で育ったコリアンです。そやから、ぼくを育てたのは日本にある良心だと思うんや。それしかわからへんのやし。ぼくは。そやからぼくは自分が日本のいちばんいいもので育てられたと考えてるんや。ぼくは朝鮮学校を出てるから、漢字もあまり読めないし、それで本もあまり読んでないけど、小さい頃から、ぼくやぼくの家族を助けてくれたのは近所のいい日本人やった。そういう日本人の心がぼくを育てた。ぼくの住んでいた生野の家は、ふすま一つ開けたら、家主の家。家主は日本人のおばあちゃんです。うちは、ぼくの小さい頃に親父が愛人をつくって出ていったから、母とぼくと兄弟と七人が暮してたんやけど、そのうち二人はグレたんやけど、家主さんは目の見えない人だった。

ぼくは幼心に、大家さんは淋しいんやと思った。心の苦しみは、孤独以上に辛いもんはないんやという事は、この大家のおばあさんがぼくに教えてくれた。ぼくの本名はミヨンス(明秀)とゆうんや。康秀峰の秀峰スポンというのはいわば芸名。おばあさんはぼくの足音でぼくやとわかる。だから、学校を帰ると、おばあさんは足音聞いて、すぐ「ミヨンス」とぼくを呼んで、「今日学校でどんなことあったん。」って聞くんや。あったことを話してあげると、とても喜んだ。五円くれた。ぼくの家はその頃お小遣いもらえるような状態やないからね、その五円がめっちゃ嬉しかった。なんで五円くれたか、理由がわからなかった。次の日も、ミヨンスと呼んだ。また五円もろうた。三日目になって、その理由がわかった。一日中家におってね、独りでいるおばあちゃんの淋しさが。四日目はお金もらわなかった。いらないうって。最初の日は怖かった。なぜかという、毛が真つ目で眼も真つ自なの、おばあちゃん。昔だから部屋暗いでしょ、それに視覚障害やから電灯つけないから。だから暗い部屋に白い眼だけが光っていてね。最初ぼくは震えてた。でも、それからは、ぼく毎日おばあちゃんのことへいった。

生野では、そういう優しい日本人がおった。貧しいコリアンに快く家を貸してくれる日本人がおった。この五円にはこんな思いもあるんよ。ぼくの家の向かいバラックで、国の土地に建てたんやと思うけど、そこに日本人の孤児たちが住んでた。四人ぐらい。おばあちゃんにもらった五円でその子らとお菓子買って食べた。自分たちだけでは使わなかった。その子らは半年ぐらいたったらジープに乗せられてどこかへ連れていかれた。養護施設みたいなところへね。

その子らとのかやけど。ぼくはこの子らを一回祭りに連れてゆきたかった。生野の御幸森神社の。その五円とか、あとぼくはお年玉とかもらえたから、それを貯めて、祭りの日に、

それでこの子らと一緒に祭りにいこうと一散に帰ってきたら、その貯金箱壊れた。ぼくの足の悪い弟が壊して、金取って、祭りにいってしまつた。金全部使ってきてしまった。ぼくは、弟とその四人の子らと、間に挟まれてめつち辛かつたな。弟もよっぽど祭り楽しみにしてたんや。ぼくは弟に買ったお菓子四人の子に分けてあげてと頼んだ。弟は分けてくれた。

「心の苦しみは、孤独以上に辛いもんはないんやということ、この大家のおばあさんがぼくに教えてくれた」という康さんの言葉は胸を打つ。そこには人間というものへの直じかの共感がある。あらゆる境界を超えて、いわば裸形の人間にむけられた直の共感がある。共生という契機を成り立たせているものは、この裸形の人間にむけられた直の共感である。

実験台

康さんの経験には暴力という問題がつねに背中合わせに貼りついている。彼の「愛」はつねに暴力と向き合っている。そして、暴力とはつねに境界の暴力だ。《敵》と《味方》の二分法こそが、暴力を、それを振るう人間に正当化させる。そして人間は自分の暴力を正当化することなくして他者に暴力を振るうことはない。暴力は是が非でも自己正当化の論理を必要とする。その正当化の論理とはつねに境界の論理だ。奴は《敵》だ。そして《敵》とは決まって「先に手を出した者」だ。だから《敵》に対する暴力は正当防衛のやむをえざる暴力であつて、暴力としての暴力ではないと、つねに《暴力》は自分を正当化する。康さんの「愛」はつねにこの境界の暴力との対決として生きられる。「汝の敵を愛せ！」というかのイエスの叫びは、全世界から徹底的に《他者》と見なされ、それゆえに《他者》によつて責め苛まれたユダヤ民族の経験の只中から生まれた。同じ叫びが一人の在日コリアンの経験の只中から立あがる。境界を超えよ！我が敵を同胞として擁け！

バブル経済が始まった頃、ご他聞にもれず、生野も地上げ騒動があちこちで持ち上がった。康さんはその頃障害者の共同作業所の運動に取り組んでいた。共同作業所がある土地を更地にして地上げするというので、ヤクザが共同作業所を撤去しろと脅しにかかったことが何度もあつた。そのときのことを彼はこう語った。

ヤクザも気の毒です。コリアンと被差別部落が多かつた。ぼくは独り共同作業所に寝泊まりして作業所を守りました。でも、ぼくを攻めてきたヤクザはみんなぼくの家来になつてくれました。兵庫、和歌山、四日市、親分は一〇〇キロ以上の黒服の大男連れてくるよ。でも、ぼくは、ぼくの真心をゆうもん。真心と真心との勝負やね。相手の話はみな聞く。あんたがヤクザになつた気持はようわかる。そやけど、次の世代の子にね、ぼくの子は今七つやん、ぼくはヤクザさしようない。そのためならばぼくはヤクザになつてもええで。そんなこと話してたら、組長はヤクザよりも根性あるなつて。ぼくを隅っこに呼んで、ぼくに土下座した人もおつたね。家来においてくれて。コリアンのヤクザで、コリアンは酷いことされたのに

なんで日本人を助けるのやって、どなり込んできた人おった。説得するのに二時間かかった。あんたを説得できなかったらあんたと決闘するで、とゆった。あんたの気持はようわかる、なぜ、俺の気持をわかってくれないんや、あんたはそうやって女遊びして暮してるけど、俺は二十四時間を削ってボランティアしてるんやで、俺も指切るからあんたも指切りいな、そう詰め寄ったら、そのヤクザはちよつとトイレにいかしてくれてゆって、間をおくのやね。このままいったら自分の命も危ないと。刺し交えはたまらんと。

康さんは自分を実験台とみなしている。あるいは肥料と。愛の。

一台の飛行機で二〇万人殺すでしょ。広島、長崎の原爆。計二〇万人殺されるということは、二〇〇万の人間が苦しむということやね。殺された人の親兄弟、恋人、妻、友達。それを考えると見えてくるのね。物体はすごく高度に発達したけれど、愛の方は退化しているってことが。なぜこの日本という国は障害国になったか。

仮に両足それぞれ一メートルあったらいちばん歩きやすいとするやん。ところが一方の足は一メートル九十センチに成長したが、もう片方は反対に二十センチに縮んじやった。当然ひどいチンパで歩けない。そういう障害を負った国になったんよ。

そやから、ぼくは愛の復活を考える。愛も愛の思想もずっと昔からあったんやけど、そして立派な人間もたくさんいたんやけど、昔は今みたいな競争社会ではあらへんかったし、文化も発達してなかったし、こんな風に決楽で皆が冒されているということもなかった。そやから新しい愛の復活がなされねばならないと、思う。宗教でいったら、イエスさんと空海さんと、その他いろいろな人がね、化学反応を起こして欲しい。科学がつくった原爆に対して愛の化学反応が起きて、原爆を落とせなくするバリアーをつくって欲しい。その、ね、種になろうと、ぼくはね。民族差別も、リユーマチの障害も、みんな肥料になってくれた。たまたまぼくは運がよかったと思う。たくさんの肥料をもらって。ぼくは十代の頃から人間に愛と希望を吹き込んでくれる大きな思想をもった人を求めてきた。でも、結局出会わなかった。でも、そうゆう人が必要です。ぼくは自分がなれたら、と思った。ぼくは四〇歳から勝負をかけていった。

国境で差別されたのがぼくたちでしょ。権力者が勝手に引いた。そやから、あらゆる境界を越えるというのがぼくの選んだ思想なんや。ぼくのやってるのは愛の実験だと思ふ。原爆も何回もいろんな実験をしてきたんでしょ。ぼくの女房は薬局に勤めていて、一つの薬をつくるのに動物を十萬匹は殺すといった。

そやから、原爆に勝つためには、愛の実験を何度もやらないと、原爆に勝てる愛は生み出せない。ぼくは自分のことをモルモットだと考えてる。愛の実験台ですよ。在日の同胞から、コリアンのヤクザからどんなに攻撃されても、愛を貫く、それがぼくの実験やね。ぼく一人の命では原爆に勝てる愛を生み出す実験には足りない。けれど、肥料になれる。実験をやり続ける。一人やけど、一〇〇人分ぐらいの肥料になれたらいいな。自分が生きて、これできると思っていないの。バトンを渡してゆく役やね。

コリアボランティア協会の賛同団体には、それぞれをとると敵対しあっている団体があるんですよ。ときどき、なんでこの団体入れてんねん、と敵対しているもう一方から文句がでるときがあるんやけど、そうゆうときは、協会にとってはあんたがたが必要だと同じようにあ

の人たちも必要なんです、と説明してます。

うちがある限り、ここは一緒なんですと。なぜかというところ、うちは物体じゃなくて、香りを放つから。香りはぶつからないんです。香りは、もし台風なんかがきても、海を渡れるんですね。この人にはこの香りを、その人にはその香りを、そういう柔らかな優しい自在なものやね。愛は香りだと、ぼく思うてんのや。結局ね、ぶつかると、垣根が生まれてしまう。垣根がきたら障害者の車通れなくなる。遠くまで届いてゆく香り、その力をもった香り、愛とゆうとき、ぼくのイメージは香りやね。

境界の暴力を超えるという康さんのテーマは、おそらく彼のなかでは組織というものがどうしようもなく孕んでくる境界の力学、あの「仕切る」という力学への意識的抵抗というテーマと結びついている。彼は、彼の組織であるコリアボランティア協会について、また協会と彼との関係についてこんなふうなことを語ってくれた。

ぼくは代表ですけど命令はしません。ただぼくの姿を見せるだけです。それで愛の実験をやっていることをわかってくれたら、それでええ。うちの協会の専従になってくれる人の給料はいま月一万円です。九人の専従がいます。みんなやめずに一緒にやってくれています。はじめは一人でも残ってくればいいと思ってた。それが九人も残ってる。誰もやめないで。この九人がいて、それで今八千人のボランティア組織ができた。これは日本でいちばん大きいんですよ。大阪ボランティア協会は五〇〇人や。これは化学反応起こしていつてるんやないかな。

ぼく代表しとるけどね、目標とか結果のためには動かないんです。心のなかで自分を育てる目標はええけどね。人間は目標を立てると、他人が道具に見えてきてしまうの。ぼくはそういうのをいっぱい見てきたから。だから、ぼくはしなない、と。今、コリアボランティア協会は建物の持主の事情で建物から追い出されて、仮住まいの状態やけど、それええのとちがうの、と思うねん。建物があつたら、だんだんボランティアは企業化していつてしまう。八千人の会員がいてもね、コリアボランティア協会には規則というものがありません。ただ、ええことやつたら、なんでもやろう、ということがあるだけ。

僕は康さんの女性的な印象について語った。事実、彼は男性の粗暴さを軽蔑し憎んでいる。僕の勘は的中したといえるだろう。

男性のオーラは蛆がわくけど、女性のオーラはほんとうにまわりを輝かす。それはね、女性は苦勞してきてるでしょ。どこでも。だから目配りがいってると思うね。ほんとね、男性ってね、ぼくは自分が男やけど、平均的にね、男性は力だけあって、他はみんな劣ってるな、と。そう思う。ここまで人類が成り立ったのは女性の力が大きいのとちがうかな。ぼくのとこかて、障害者二人おって、親父が愛人つくって出ていこうが、みなお袋の力で育った。親父やったら半分は殺してるんとちがう。障害者抱えたらほとんど男の人離婚するね。障害者支えてるのはみんな女やね。ボランティアやってたらそれよく見える。同じ男として恥ずかしいね。女の人は最後に力を出すね。最後を守るね。頑張るね。大地の子やね。

康さんの「愛」はつねに境界の暴力とむかいあっている、と僕はいった。そのことは彼の「愛」が非政治的だということの意味するだろうか？ 「闘争」や「政治」の論理を超える論理は、実はそれ自身が深い政治的知恵を携えていなければ、自分を貫徹できないのではないか？ 彼は、阪神大震災での「統一炊き出し」の経験に寄せてつぎのようなことを語った。

それと最近考えてるのは知恵ということ。闘いというものに愛が勝つには、知恵がいりませんね。闘いはつねに武器をたずさえてくるでしょ。その武器に勝つためには、愛だけじゃなくて、知恵がいる。

正直ゆうて、関東大震災の二の舞になる可能性もあった。しまいにベトナム人にも迷惑かかる可能性もあった。しかも日本の行政が日本人を助けようとするムードも全然なかった。ぼくは何日もこもって考えたすえ、仕掛けようと決めた。総連と民団、両方出したら絶対にだめやから、それぞれにうちとやろうと申し入れた。時間も場所もぴったり合わせて。もちろんそれぞれ相手のことは知らんわけです。病院も準備させたり、芸能人も準備させた。いざとなれば、新屋英子⁴先生にも出てもらおうと。新屋英子先生には手付としてマスクを千人分プレゼントしてもらった。新屋先生には、万が一総連と民団が戦うようなことになれば、ぼくと一緒にそこに行ってもらうことにした。ぼくはリューマチで、マッサージ師がついていてくれないと一歩も歩けない。

詳しいことはいえへんし、信じられへんと思うんやけど、あのとき、ぼくは三組の殺し屋集団に狙われた。ある人からそう聞かされた。今でこそ南北和解ムードやけど、あの頃はそうやなかった。そのうちの一组とは直に電話で三〇分話したことがある。「統一炊き出し」を始めたその晩、ぼくのとこへ電話があつて、ちょうど風呂上りで、すごく寒い晩だったけど、その三〇分汗がとまらんかった。今晩俺は殺されるな、と思った。話しても納得してくれないから、そっちへいくからというのと、来なくてええと相手はゆった。来られてしもうたら、殺さなければあかへんから、と。

でも、あの「統一炊き出し」は被災地のコリアンだけじゃなくて、日本全国のコリアンを勇気づけたね。そのことを指して、あるジャーナリストが「康さんは十年前から金大中さんの太陽政策やってたんやね」とゆったけど、ぼく、三五年前からやってた。でもそれは表面に出ない形でね。表面に出てやったら殺されてしまうからね。そういう時代がずっとあったんや。ぼくの場合は朝鮮籍だから、日本の公安にも狙われるしね。

多くの国は韓国なんやけど、登録が朝鮮なんや。はじめは在日コリアンはみな朝鮮籍やった。それが本国が南北に分裂して、そのとき日本政府は韓国籍に切り替えるのを奨励したんやけど、それはいずれ日本に帰化することを奨励するためやった。朝鮮籍をなくすことは在日の生まれてきた歴史を意識から抹殺してしまうことにつながっていたと思う。強制連行だとか従軍慰安婦とか、そういう歴史の記憶をチャラにしようんやね。

そやから、ぼくは、敢えていまも朝鮮籍を選んでる。朝鮮籍たといろんなことで差別される。たとえばぼくは化粧品会社のセールスマンしてた頃、全国一のトップセールスマンになって「褒美に会社でハワイに行くことになっても、朝鮮籍だからパスポートとれなくて、いけなかった。たとえばね、そうゆうこと。そのとき社長は韓国籍に切り替えたらええやんってゆ

うたけど、ぼく、裏切れへんかった。ぼくの気性からゆうと、朝鮮の方が損やったら、損な方につくんや。弱いもんの方につく、これ、ぼく、自分で十代のとき決めたから。

父の死

僕は昔の生野を知らない。かつて猪狩野いかいのと呼ばれていた頃の生野を。

僕のもっているのは僅かな知識。日本が朝鮮を植民地支配するなかで済州島の人々は出稼ぎ労働者として大挙して日本の阪神工業地帯に渡る。一九二二年に、済州島一大阪間に汽船の直通航路が開かれ、済州島出身の出稼ぎ労働者は大阪に集中した。彼らの多くは生野を流れる平野川の改修工事に出稼ぎ労働者として雇われる。彼らが定着して現在の生野が形成される。今日「コリアン・タウン」と呼ばれることの多い御幸森商店街は生野の在日社会の中心だ。平野川とそこに架かる橋こそ、そこに生まれた一つの〈世界〉の象徴だ。今では御幸森商店街は美しくリニューアルされ、かつてたくさんの在日朝鮮人文学やルポルタージュが語ったような面影はもうそこにはない。少なくともそこを歩く他所よその人間にとっては。

僕は康さんのつぎの話に、僕の知らないかつての生野の残影を垣間見た。それら文学や証言のなかに聞く「平野川」という名のもつ響きを、その残響を、僕は聴いたと思った。

親父、愛人つくってぼくたち一家を捨てた人やけど、ぼく、親父死ぬまでヘルパーみたいに面倒見てた。兄弟のなかには反対するのもおったんやけど。そりや憎んでいるのところが？親父のこと。愛人つくって、ぼくらの斜め向かいに愛人と住んでおったからね。お袋のこと考えたら、兄弟が怒るのもわかる。

たまたまね、夜中に老人が寒くてパッチいっちょようで動けなくて倒れてた。これはほつといたら死ぬなと考えて、助けたんよ、ぼく。その老人が親父やった。その親父はぼくのこと忘れてた。そのとき親父は八三ぐらいかな。腹立ったけど、命は助けなあかんからね。ちよぶどぼく息子と一緒に、この人がお父さんのお父さんやとゆうても、信じへんかった。

生野の平野川の奥田橋を親父は渡れへんかった。渡った方に愛人と住んでいる親父の家があったんやけど。もう寒くて弱ってしもうてた。ぼくは、それでジャンパー下に敷いて、もう一枚の服を上にかぶせて、息子にアボジ押さえておけよとゆって、愛人さんを電話で呼んで、愛人さんがびっくりしてやってきて、独りのときは出えへんのかなあ、って。淋しかったんかな。

それから親父一年半ぐらい生きてたかな。去年死んだんやけど。ヘルパー何人もつけなけりやいけないし、愛人さんも死にかけてたしね。もう憎いとかやなしにね。助けなあかんと。うちのボランティアもつけたし。ヘルパー代は痛かったけど。七ヶ月ぐらいは元氣やったけど、八ヶ月目に病院入ったかな。

結局、ぼくのこと知らんままで死んでしもうた。もう何十年と会ってへんかったからね。通りの斜め向かいに住んでおっても、ぼくは、うちのお袋を親父と思ってたし、親父に出会っても、むこうも避けるし、ぼくもお袋の手前声かけれへんし。うちのお袋がそうやって、会

わないと心決めている以上ね。お袋は再婚せずにぼくら六人を育てた。そのうち二人は障害者やし、大変やった。ただね、どうしても通りの向こうにゆかなければならないときがあるから、そのときは愛人さんの前通らんといかんから、そのときは辛かったろうな、お袋。

『いのちを生きた いのちを遊ぶ』—The philosophy of life』所収、
はるか書房、二〇〇七年

¹ 金芝河、高崎宗司・他編訳『飯・活人』、御茶の水書房、一九八九年、七頁

² 当時ヘップサンダルの糊付けの仕事は、生野や神戸の長田の在日コリアンのすることができた仕事の主要なものの一つであった。この接着剤に含まれていたベンゾールが、この仕事に従事する多くの家内労働者（主に女性であった）に深刻な中毒をもたらし、当時、零細企業・家内労働の劣悪な労働環境を象徴する事件として大きな社会問題となった。一九五九年頃のことである。

³ 詩人の丁章は詩集『闊歩する在日』（新幹社、二〇〇四年）の後書きにこう記している。《私は自分の存在をしばしば「在日サムム」と自称する。日本国の外国人登録法上、特別永住資格者であり、またその「国籍等」の欄に「朝鮮」と記されている私は、一般的な呼び方にならえば「在日朝鮮人」であり「在日コリアン」であろう。しかしそれらの呼称により、私の自己存在の政治的立場や民族的立場を充分に表わし切れるのかと言えば、否である。かねてからどうもしつくりせず、しだいに物足りないという想いが強くなり、いつそ新しい呼称をと考え、そう自称するようになった》（同書、一六八頁）と。たとえば、そのような新しいアイデンティティの模索が始まっていることもここに述べた問題は重なっている。

⁴ 新屋英子、女優。代表作は、在日朝鮮人のオモニ（母）を演じる一人芝居「身世打鈴」（初演、一九七三年）。